

いとう
伊藤 おさむの市民ニュース

ホット・ホット・越谷

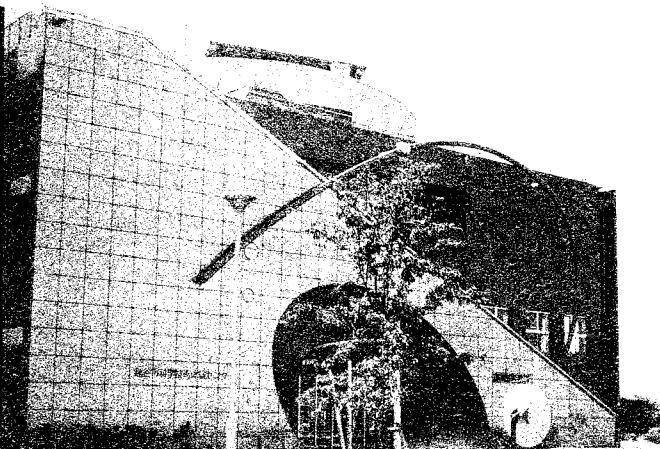
発行責任者：高橋 正久

平成14年10月1日発行 No.3

〒343-0838 越谷市蒲生三丁目七番七号

TEL 048-985-4826 FAX 048-989-2397

E-mail osamuchan@ae.wakwak.com URL http://www.ae.wakwak.com/~osamuchan



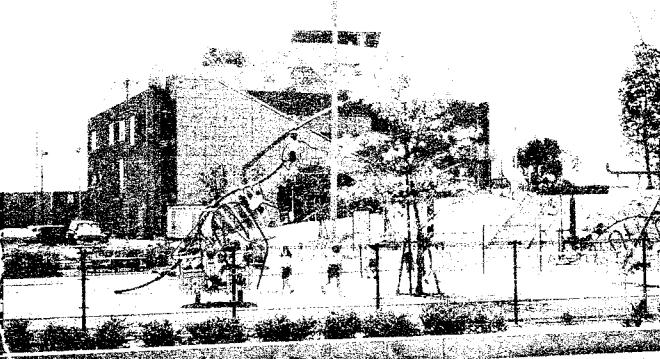
科学技術体験センター（ミラクル）

越谷市七左町二丁目にある科学技術体験センターは、「科学事始～わくわく体験・夢・感動」のテーマのもと、観察や実験・工作などの五感を使った体験をとおして、未来を担う創造性豊かな人材の育成を図ることを目的に設置された施設です。

そして、

- (1) 観察・実験体験センター
- (2) サイエンスボランティアセンター
- (3) 科学教育研修のセンター
- (4) 科学情報発信センター
- (5) 「物質とエネルギー」の科学センターという、五つの機能を持つセンターでの体験が夢の実現につながり、素晴らしい未来が来るようにとその願いをこめ、愛称を「ミラクル」と名付けられました。

また、正面には公園があり、天気のいい日などは、近くの保育園児や、小学生が元気に遊ぶ姿も見られます。



七左第四公園

新しい風

よく言われる言葉に「行政と議会は車の両輪」というのがある。この片方である「議会」が、本当に車輪としての役割を果たしているのか、市民として少し検証をしてみたい。まず、議会として最も問われることは、行政に対するチェック機能である。それは、税金の使い道が有効に使われているか、市民の立場で考え改善を求めていくものである。

その為には、行政政策の一つ一つについて、確かな根拠を持って検証していくことである。その、自らの考えに基づく、行政施策に対する厳しい監視と、政策提言、改善要求をおこなう場の一つとして、定例議会で的一般質問がある。

ところが、この議員の命とも言うべき議会発言を、一度もしない議員が多いのが実態なのである。ひどいのは、四年間一度も発言しない議員もいるのである。これでは、何のために議員になったのか理解が出来ないし、議員の資格はないのである。議会を変えなければならないといふ意味は、議員としての仕事をきちんとすることが、市民に問われていることである。

（正風）

伊藤おさむ後援会結成総会へのご案内

私達呼びかけ人は、来年の統一地方選挙に立候補を予定している、伊藤おさむさんをみんなの力で議会に送り出したいと考え、その支援、協力のための後援会を立ち上げる、結成総会への参加をお願いいたしました、ご案内致します。

私達呼びかけ人が、伊藤おさむさんを議会に送り出したいと考えた理由の第一は、若さと行動力への期待です。

ご存知のように、何処の地方議会も高齢化が進んでおり、とりわけ越谷市議会には20～30代の議員がおりません。新しい時代の21世紀は、この時代を担う若い人々がより増えることによって、議会も構成され運営されるような仕組みを作っていくことだと思います。第二に、発想・感性が豊かで、様々な領域にわたって関心と問題意識を持って考え、行動している伊藤おさむさんへの期待です。四年間、一度も議会で発言しない、議員の役割も認識していない議員が多い中で、今最も問われているのは、議員の資質、力量を持った人材としての議員であります。第三には、伊藤おさむさんの人柄であります。誰にでも笑顔と挨拶を忘れず、周りの人々から親しみと好感をもたれています。第四に、伊藤おさむさんは障害を持っております。行政政策を見る視点も、町の中を歩きながら考えることも、常にハンディを持った人々の立場や、目線で見ることを忘れません。

私達呼びかけ人も、こんな人が議員であって欲しいという思いに、かなつた人であると確信しております。

私達呼びかけ人は、皆様の熱いご支援、ご協力を得て、盛大な後援会の結成が出来ますよう、周りの人々をお誘いの上、ご参加下さいますようお願い申し上げます。

平成14年10月1日

呼びかけ人一同

記

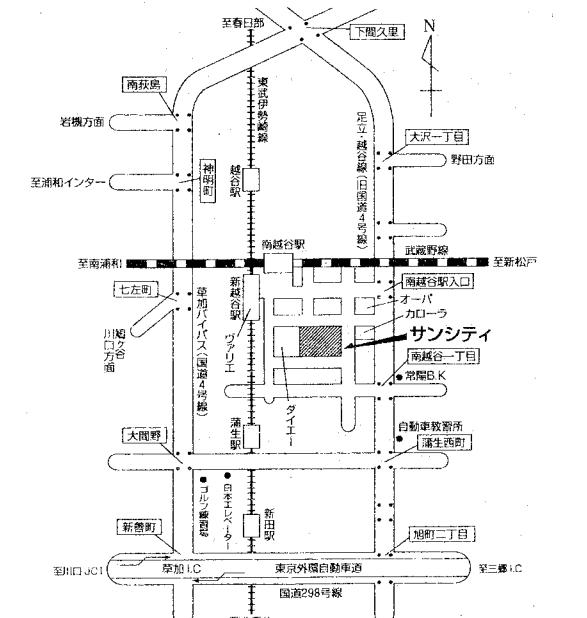
1・日時 11月9日（土）午後7時～9時

1・場所 越谷サンシティ一結婚式場（桐の間）

1・会費 2,500円

1・連絡先 越谷市蒲生東町8-37 伊藤
048-986-9553

尚、結成総会終了後、懇親会を行います。



伊藤 おさむさんが南中学校で講演！

学校教育が変わり始めた

文部科学省の「新学習指導要領」により、「総合的な学習」が取り入れられ、全ての人々が福祉に対する意識を高め、日常の行動の中で「自立」と「共生」のバランスのとれた行動を進めるために、今年から越谷市立南中学校でも社会福祉についての授業が取り入れられました。

そして、伊藤さんが「ホット・ホット越谷」に書いた「バリアフリー検証」という文書を読んだ先生が、障害を持つ伊藤さんの話を聞く授業を開きました。体育館には、中学1年生全員が座り、伊藤さんの話を熱心に聞きました。

講演内容(障害を持った身になって)

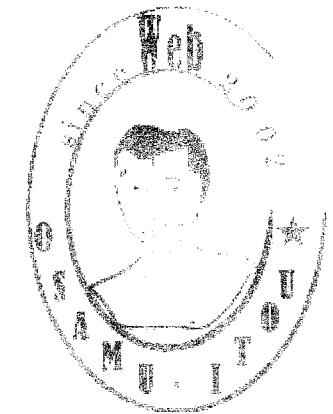
伊藤さんが6年前、突然障害者になってしまった経緯から、障害を持つ身になっていろいろ味わった苦しいこと、悔しいことの体験を通して、健常者であった時の自分では持つことが出来なかつた気持ち。そして、障害を持った人達の立場や目線で物事を考えたり、見たりすることが出来たようになった。例えば、雨の日にファミリーレストランへ行き、タイル張りの上を歩いて滑ったことなど、私達の生活する環境は健常者の立場で成り立っているのが現状であること。それは、まだまだ社会や人々の中に、障害を持つ人々についての理解や思いやりが足りない事だと感じていることから、福祉とは、人に対する思いやりの気持ちであり、それは身近なお父さん、お母さん、兄弟に対して家庭の中から日常生活的に持つことによって養われるものだという内容でした。



生徒の感想

自分は、走ったり飛んだりすることが出来て恵まれていると思いました。例え話のように、家ではケンカをすることの方が多いけど、今度はやさしい言葉をかけてあげたいと思います。いいお話を有り難う御座います。

障害を持った人の、生の声を聞くことを通して福祉を考える、教育学習の新しい試みは、きっと伊藤さんの言う、思いやりのある社会づくりを担う世代を築くのだと思います。



~「ふるさと」がここにある~

普通、誰しも「ふるさと」は、田舎にあると思っています。

しかし、戦後50年も経つと、都会でも「ふるさと」になります。その一つの例として、蒲生地域の人々の生活があります。昭和30年代から、40年代にかけて住み着いた人々がこの町に定着し、子供を産み、育て、地域社会を築いてきました。

育った子供達は、様々に別な地域で生活している人も多いけれど、親の世代は今でもこの地域に生活し、地域の人々とコミュニティーの中の暮らしを楽しんでいます。

その中でも、17年前から、先日亡くなった伊藤喜代治さんらが中心になって始めた、5月の連休に蒲生東町の「まつり」があります。この「まつり」は、3日間も行われる盛大なもので、全国に散っている子供達も、家族そろって帰ってくる祭りとして定着しています。「ふるさと」は、自分達が生まれ、学び、遊び、生活した地域であり、家族、親戚が集まる家です。蒲生東町の「まつり」は、「ふるさと」再生を意識して創り出したといいますが、確実に都会の中の「ふるさと」になっています。

(蒲生 斎藤さん)



伊藤 おさむの ~バリアフリー検証~

「地震・雷・火事・親父」という言葉をご存知でしょうか。これは、世の中で怖いものを順番に並べた言葉です。私の場合「親父・雷・飛行機・ケーキ」でしたが、つい最近、父が他界し、一番怖いものが世の中から無くなりました。本来、「怖いものは嫌なもの」なのでしょうが、私にとっては、大好きで、大切な存在の人でした。そんな父のことを振り返りながら、心のバリアフリーについて考えてみたいと思います。

8月のお盆も過ぎた頃、以前から体の不調を気にしていた父が、急に検査の為入院をするということになりました。どんなに体調が悪くても、医者にいかないような父が自ら入院するのはよっぽどのことです。レントゲンの結果は急性肺炎という診断でした。

健康な人なら、肺炎と死とでは直接結びつかないと思いますが、病気には「たんなる」とか「たかが」という言葉は禁物で、誰もがかりうる病気でも確実に治療しておかないと、とんでもない事態になってしまうことを知りました。

また、父のような自らを律して生きている人に対しては、周りにいる人が、例えお節介でも気を配っていたらこんな最悪の結果になつていなかつたのではないかと考えて已みません。

そして、子供が生まれ初めて親のありがたみを知り、親を失い初めて親の偉大さを私は知りました。

心のバリアフリーとは、人を思いやる気持ちです。障害を持った人はもちろん、他人に対して自分と同じように思いやることです。そして、その第一歩として、親を大切にすることから始めましょう。